



▶岩手県滝沢市▶1998年開学
学生数/約2100人 学部/看護、社会福祉、ソフトウェア情報、総合政策
大学院/看護学、社会福祉学、ソフトウェア情報学、総合政策

Case Study

看護系教育課程の質保証

↓基盤的能力・実践力の教育と評価を再構築

岩手県立大学

看護系教育機関が増える中、大学ならではの教育と質保証に取り組む看護学部。改革に至るまでの取り組みを聞く。



高等教育企画部副部長 看護学部准教授

工藤真由美

くどうまゆみ ●2004年兵庫県立看護大学大学院看護学研究科修了(看護学)。国立循環器病研究センター、聖路加国際病院にて看護師として勤務。日本看護協会神戸研修センター継続教育(チーフマネジャー)、福島県立医科大学看護学部講師を経て、2012年より現職。

学士課程ならではの初年次教育の質保証

本学では新学長体制になった本年より、全学的な教学IRに取り組んでいます。中でも開設20年を迎えカリキュラム改革が迫られていた看護学部では、先んじて学修成果の可視化に取り組んできました。この背景には、超高齢社会を迎え質の高い看護人材養成の期待が高まる中、全看護系大学共通で取り組むべき「モデル・コア・カリキュラム」が策定されたこと、看護系大学急増に伴う教育の質保証が課題となっていたことがあります。

可視化には、「教育課程」と「DPの達成度」の二つのフェーズがありますが、私たちは、特に前者に時間をかけました。というのも、可視化は「成果」の測定だ

けでなく、教員自身が教育課程そのものを理解し、カリキュラムの全体像を見えるようにすることが大切だからです。そのため、まず全教員で「我々は何のような看護師を育てたいのか」という議論を重ね、それを概念化してDPとして表しました。そのうえでDPと現状の教育課程の関連を可視化し整理していききました。

本学ならではの質保証を考えたときに、ターニングポイントとなったのは、アカデミックスキルを修得する初年次教育入門科目の改革です。学士を持つ看護師養成の要の科目にもかかわらず、シラバスもなく、内容や学修目標、評価基準も教員によりバラバラでした。これでは学びの質が保証されているとは言い難い。そこで教員が協働で学修目標を再検討し、統一プログラムを策定したのです。

看護実践力を可視化し 実習先と共に教育改善

この科目の学修成果については、基盤的能力を測る外部アセスメントテストを導入し、学生の思考力や態度が授業を通してどう成長するのかを客観データとして確認しています。プログラム改革以降の学年のスコアがアップし、手応えを感じています(P.27コラム)。

看護師になるためには実践力も欠かせません。看護実践力の指標は、日本看護系大学協議会がまとめたコアコンピテンシーを参考に作成し、学生にコアコンピテンシーに対する自己評価をさせ、4年間の成長の全体的な傾向を把握できるようにしました。また、実践力を養うのに必要な経験の有無を可視化するため、4年間の実習

経験を記録する「技術確認表」を作成しました。看護教育は実習先での経験や指導も重要なことから、学生の記録データを実習先にも共有したところ、実習先での指導改善にもつながっています。これらの取り組みで得た結果を根拠に、学生が卒業までに身に付けるべき力を6つに分類し、新たなDPの学修目標に反映しました。CPの見直しも終わり、今は教育課程の改訂に取り組んでいます。同時にアセスメントポリシーを策定し、アセスメントのあり方を検討しています。教育を変えても、成果を測る方法がなくては、その成否を検証しようがありません。教育と評価方法はセットで考えるべきでしょう。

これからは私たちが育みたい看護師像実現のために、全力で取り組んでいきます。

可視化の目的

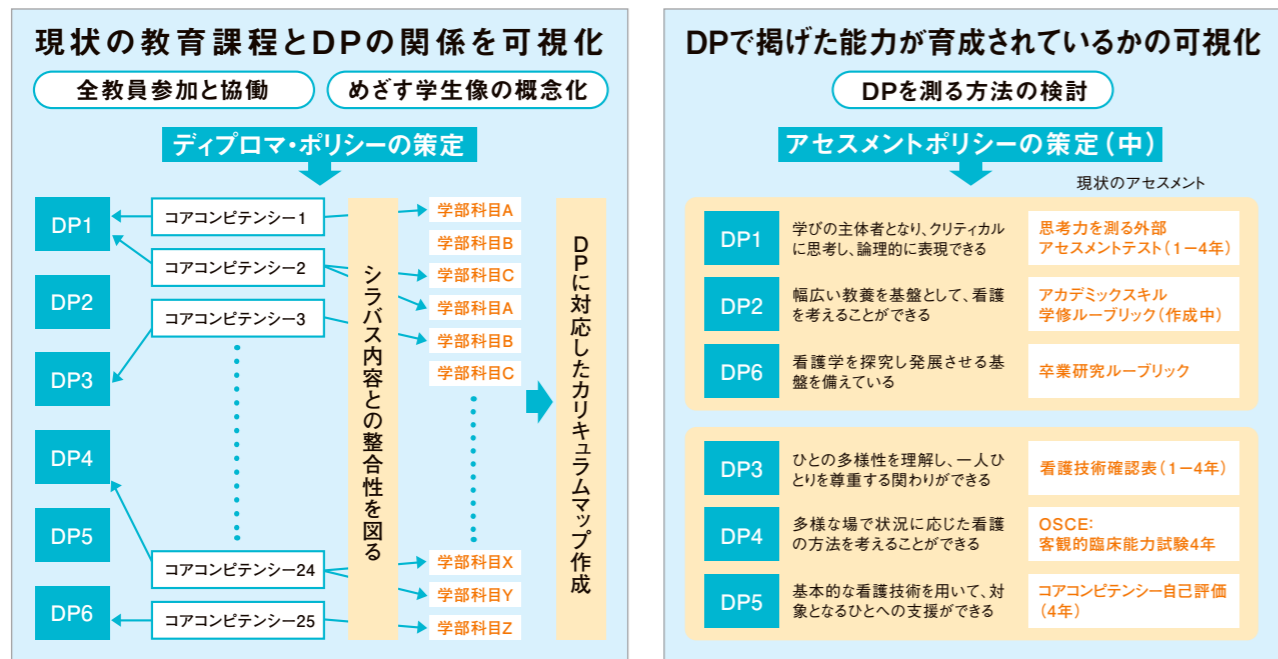
- ▶カリキュラムの見直しとそれに伴うDP、CPの再策定に際して、学修目標を設計する根拠として学生の力を把握。
- ▶設定した学修成果の経年推移を確認し、カリキュラム改善の参考とする。

組織・体制

- ▶スタート時は教務委員会のFD研修の中で議論を進めていたが、2年目から「教育課程検討委員会」として独立し、新たなDPを実現させる新たな教育課程を策定中。
- ▶可視化に至るまでのプロセスを重視し、まずは教育課程を教員間で可視化することに時間をかけ、その後教育課程で育成した成果を可視化するという段階を踏んでいる。

可視化のしかた

学修の成果活用のための2つ可視化



注目!

看護のマネジメント力を高める 思考力、言語化能力、振り返り習慣

看護学部では、1年次にアカデミックスキルを身に付ける入門科目として「基礎教養入門」「学の世界入門」を設けている。これらは「読む」「書く」「聴く・発言する」「考える」ための技法を学生に身に付けさせるもので、授業ではレポート提出やグループワーク、プレゼンテーションなどを課す。ここで育成される課題発見・解決能力、言語化する能力、振り返りの習慣は、プロの看護師としても必要な力だという。「作業に追われがち看護の現場で、日々の業務を振り返って考える力、目の前の現象を言語化する力は、ケアの向上を図るうえでとても大切。若いうちから訓練しておくことが必要だ」(工藤准教授)。

もともと思考力を測る外部アセスメントテストを導入したのは、基礎教養科目などで養成した「考える力」を可視化する狙いがあった。今後は毎年同じ時期に受検機会を設け、入学年度ごとに経年推移を確認して、授業内容の拡充を図る参考にするという。



▼改革後の初年次教育を受けた学生の思考力アセスメント成績推移

	総合スコア	批判的思考力	協働的思考力	創造的思考力
2年次	46.9↑	45.6↑	49.2↑	48.1↑
1年次	42.5	40.7	44.4	41.3

*1 文部科学省が全国の看護系大学が学士課程における看護系養成教育において共通して取り組むべき内容を抽出し、各大学のカリキュラム作成の参考として示した。卒業までに身に付けておくべき必須の看護実践能力について、その修得のための具体的学修目標を提示。2017年10月公表
*2 「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」